

跋 = = = 猪・鹿・狸より

えて冬にありがちな天候であった。夏分にあるアブラ日というのともちがって、どんより落ちついて、晴とも曇とも、境目の判らぬような空合いである。こうした日に限って、ものの隈がはっきり浮いて、遠くの山の木の葉も、一枚一枚算えられる。大小様々の恰好をした山のツルネに囲まれた中は、まるで水の底のような静けさを保って、次の瞬間に、何ごとか待ち受けてでもいそうな一刻である。

こうしたおりであった。体中の血も暫く流れを止めたように、懶くて、肉体が表面からだんだんぼかされて溶けて、まわりの空気から土の中へ沁み込んででもゆくようである。何処かこう、地の果てからでも湧いて来るらしい、幽かな喧噪が、次々に漂って来た、それが一度、肉体のどこかに触れたと思うと、たちまち異常な緊張が蘇って来る。それが何であるか説明は出来ぬが、あつ何処かで猪を追（ぼ）っている。と口の端へはもう出て来たのである。じつと耳を澄ますと、如何にも何処かでほいほいと掛け声がする、きゃんきゃんと細い犬の鳴き声も聴こえる。なるほど猪追いらしい、やがてそれらの響きが、次第に近づいてはっきりして来る。風が峯を渡ってくるようだ。

狩人が猪を追って、山を越えて近づきつつあるのだ。鉄砲の音がした、矢声が続けさまに響く、猪追いは今まさにたけなわであった。畑に働いているものも、路を歩いていたものも、もうじつとしていられぬような気がした。何処だろうと、仕事の手を休めただけでは済まされない。思わずあてもなく走り出すものもあった。人々の胸には、猪の走ってゆく姿が、明らかに眼に映っていたのである。

村の人々にとっては、猪追いそのものが、単なる興味ばかりでなかった。別に何ものか劇しく心をひかれるものが、体のいずれかに、まだひそんでいたのである。

こうした村の人々が、獣の話に興味を抱き、好んでそれを物語ったり聴こうとしたのも、実は由来が遠かったのである。狩りの話が面白くて忙しい仕事も忘れて、畑の隅にしゃがみこんだまま、半日つぶしてしまったなどのことも、ちっとも無理ではなかったのである。

猪・鹿・狸と獣の名が麗々と並んでいながら、獣そのものの話が、いたって少なかったことは、語るものとしても誠に遺憾である。獣の話が少ない理由は、実は別にあつたのであるが、話の内容としては、この話の全部が、本来『三州横山話』と一緒に語るべき性質であった。従って話の範囲も、横山の村を中心とした、わずか数里に亘る地方より以外には、ほとんど及んでいなかった。こ

とごとくそこで生まれて、成長したものである。そこで『横山話』とは絶えず触れ合っているながら、どちらか一方に纏めて、筋目立てることの出来なんでは誠に歯痒い限りである。

自分にとっては、横山は祖先以来の地で、生まれて十数年間は、ほとんど一歩も外の地を踏まずに、育まれて来た因縁の土地である。境遇も感情も、ただの村人に成り切っていたであろう。もともと普通の百姓家に生まれて、村一般の仕来りの中で育ったのだから、これは当り前のことである。話にしても、村の人が興味を持って語ることを、そのまま素直に受け入れたままである。あまり村の人そのままであることに、今でも驚いているぐらいである。しかし仮にこの物語の内容に、村の人らしくない、心持に隔たりがあったとすれば、それはこの話をする現在である。東京に十幾年暮らしていたためである。そのためなまじい都会人らしい常識が混ざって来たとしたら、話そのもののためには、本意ないわけあいである。しかしそのことはどうとも致し方ない。どうやら横山に咲いて、小さいながらも、実を結んだのが、東京だったとするより詮ないことである。

獣の話が少なかった理由は、第一には蒐集がまだ充分でなかったことにもよるが、それよりも、本来を言うと、横山附近の土地が、彼ら獣にとって、すでに足跡の余り濃い地方ではなかったかと考えられる。地勢から言うても、そうではないかと思う。仮に足跡が濃厚だったとしても、もう久しい以前のことで、近世では、彼らのために一カ所取り遣された場所に過ぎなかった。そんな風に考えられるのである。こう言うと、話の内容と、大分矛盾する点もあるが、彼らが土地から姿を匿したのは、村の人々が信じていた如く、三〇年、四〇年程度のものでなくて、その間に、もっと隔たりがあるのではないか。実は話にしても、事実にしても、まさに尽きんとする炉の櫓火が、炭に変る時の、最後の輝きを見せられていたので、たとえば話の一つ一つを克明に辿ってみても、どうもそれ以前に、大分影が淡くなっていたらしい形跡が認められる。

もちろん程度の問題であるが、たとえば明治三〇年頃の、段戸山中に現れた夥しい鹿の群れなども、実は久しい言い伝えの幻影であって、事実はかつてある時代に、峯から峯を越えて、霧の如く消え去ったもののように考えられる。仮にこの判断が誤っていたとしても、四周の状況から見て、何処までも話のままを事実として言い張れない気がする。

今一つの理由は横山の地勢であった。山とは言い条、一方外界との交渉がはげしくて、静かに話を繰り返しているには、あまりに亡しすぎた。早くから汽車の笛を聞くようになったことが、獣以上に、早く話を亡びさせてしまった原因の一つであった。

横山は東三河を縦貫した豊川の上流で、遠国国境には、三、四里の路程にある一寒村である。村から言うと、西南方すなわち豊川の下流地方と、北東山地との境界に当たっていた。東海道筋からはいて、豊川の流れに沿った七里の路は、やや平坦な丘陵を縫うて走っていたが、ここから急に山が高くなって、路は山また山の間を、信濃に向って辿っていたのである。その間はいわゆる北三河の山地で、現今の北設楽郡で、昔の振草の里であった。

段戸山を初め、月の御殿山（ごてんやま）三つ瀬の明神山など、代表的深山でそこはまだ文明の光も透さぬ、天狗山男の世界の如く永いこと信じられて来たのである。山稼ぎを職とする杣木樵の類も多く入り込んでいた。その連中が、珍しい物語を運んで来て流布したのである。自分などもそれを好んで聴いて信じたものであった。鹿、猪を初め多くの獣の本拠もまたそこにあつて、村が山続きに続いている如く、獣もまたそこと連絡していると信じていた。ちょうど表口と背戸のように、一方東海道筋の明るい交渉を受けながら、背戸口は依然として、昔の山の影響が深かったというのが、横山の実際だったのである。

しかしながら、村のものが、獣の本拠の如く考えていた山の実際も、今日では話そのものと大分の隔たりが出来た。今年の正月、北から南へ振草の里を越してみると、自分が歩いた範囲では、猪鹿の類もとくに姿を消してしまって、もう二〇年も経っていた。猪などは反って、わが所在の方が本拠のように思われた。実は以前から信じていた、山続きの交渉は、いつか断たれていたのである。して見れば横山の猪なども全く孤立した山際に取り遣された集団の一つに過ぎなかった。それも、わずかな数であった。一個の猪の影を、地をかえ人をかえて、幾つにも見た程度のものである。

ここに集まった話がちょうどそれであった。山陰に取り遣されたもので、とくに消えていたはずのものである。それだけに、内容のない、影の淡い話ばかりだった。その上にも話の一つ一つが、何年前のこと、何処の出来事と、そのおりおりに呱呱の声を挙げたものばかりでなく、話が生まれると同時に、もう久しい伝承の衣を着けていたらしいのである。

獣ばかりでない、猪、鹿、狸に絡んだ人間のことや家の物語もそうであった。いちいち正確な事実の記録とばかり極められなかった。たとえば鳳来寺行者越の一つ家である。そんなに古くもないことが、幾通りにも語られていた。剣術使いの又蔵老人が死んだのは、明治になってらしいが、相貌の説明にも二通りあった。一眼であったと言う一方に、いやそうでないと言い張るものがあった。いやたしかに一つだった、現に一つは弓術の遺恨から、大野町の某に、欺し討ちにされたと言うのである。しかしこうした問題は、年次によって、どうとも

解釈せられたから文句はないが、四尺幾寸の小男であったことは確からしいのに、立派な体格だったなどと、途方もないことを語るもののあったことである。こうなると、話も何を的に聴いてよいか判らなかつた。話し手の精神状態から研究して掛かる必要も生じて来る。しかしそれは到底不可能なことである。せめて話し手の姓名年齢から、出来れば性質も少しは挙げる必要がある。性質はまだしも、生命と年齢はぜひとも言わねばならぬ。それが多くの場合不十分であった。実はたいてい判っているのであるが、いろいろの筋合いから、わざと省いたことである。それには話の煩わしさを考えた結果もあるが、もっと大きな理由は、その人々への遠慮であるが、読者には誠に相済まぬ次第であるが、こうした類の話の種になったことを、何か馬鹿にでもされた如く、思い込んでいる人が、まだあるらしいのである。もちろんその人々として、それが真の心持ちではないと思うが、そうした心遣いから、話にまで手加減した点もまたあったであろう。

この話が世に出るについて、第一に思い出さねばならぬことがある。東京の山の手の、檜の木立に囲まれた家であった。そこは外濠に近い高台の屋敷町で、東京の町中でありながら電車の響きも大分遠かつた。西向きに庭を控えた部屋の、片隅に置かれた椅子に腰を下ろすと、硝子戸越しに、うっすらと青苔を被った庭土が見えた。ちょうどその中央あたりに、桜桃が不調和に枝を伸ばしていて、それと向かい合って、古いドウダンの株があった。庭の行詰まりは、高く伸びたカナメの株が並んでいた。今思うと、もう幾年かになった。その部屋を訪れるたび、次から次へ、きまりもなく語った話が、いつとなしに溜まってしまった。たとい塵埃にしても、これだけになってみれば、このままさらに谷や川へ持ち出して捨ててしまうのは惜しい、何とかならぬかと言われるまま、思い切って似よりのものだけずつ、また小分けに拾い上げてみることになった。それがここに集めたものだったのである。考えると、かなり永い間だった。ある時は桜桃の花がもう散りかけていた。それが実を結んで、幾度か花を持ったのだ。カナメの葉が、一枚一枚目に輝いて、はっきり読まれたこともあった。寒いみぞれの来そうな日に、虎鶯が一羽何処からか迷い込んで、しきりに苔をついばんでいた。暑い夏の日盛りを、白い猫が、静かに飛石の間を歩いて行ったこともあった。今思い出して恐縮するほど、よくも臆面もなく、横山の村の炉縁を持ち出したような話を続けたものだ、そう言えば、あの椅子の前にあった四角な火鉢台が、その炉縁の役目をしたのである。してみると語り手の自分は横座に向って坐った木尻の客だったのである。仮に火鉢台に心があれば、そんな呑気話を、ここでされてたまるかと、そう言うたかも知れぬ。その間に、部屋の長押に掛っていた、むつかしい維新の元勳の書が、いつか横山の山を描

いた額に変わっていたのも偶然だった。

木尻の客は、話が済んで腰を上げて、暇乞いをして玄関を出るとほっとした。何かしら口に言い現せない、体中汗ばんだような興奮があった。外には明るい都会らしい日が照っていた。足を電車通りの方へ運ぶ間、名残の夢でも惜しむように、しばらくは村を思いつづけた。そうして、かつて自分に語ってくれた村の人々の顔が、何の屈託も忘れていそうな目付が、しきりに胸に蘇るのを感じた。

その人々の中には、語り終わった時に、眼を真っ赤に泣き腫らした人もあった。遇ったら話そうと、忙しい仕事の間にも忘れまいと心掛けていてくれた人もある。ほんの子供の頃聴いた話を、何十年か胸に蔵っておいて、問われたために語ったという女もあった。その人々の顔付きだけ思い出してみても、語った時は自分と同じ心持ちだったことが判った。よし明らかに意識はしなくとも、少なくとも話していた間だけでも、話さぬより幸運だったにちがいがなかった。

その人々の中には、もう死んでしまった人もいる。一遍は語っても、仕事や境遇に追われて、再び思い出さぬ人もあるであろう。このまま放っておいたら、いずれは何処ともなく消えて行くに決まっている。してみればこの小篇は、それらの人々のためにも、あるいはまた山陰で淋しく亡びて行った猪や鹿や狸のためにも、一基の供養塔であった。形はよし拙なくとも、建てたそのものは因縁が薄くとも、永く山口の草に埋もれつつも残るであろう。こう考えれば、あの横座の主に迷惑を掛けたのも、火鉢台に退屈させたことも、この供養塔の建つ因縁だった。どうしてもわれ一人の問題ではなかった。そう思えば、後から後から、多勢の人や獣が動いているようだ、そうだその人々に代っても、まず第一に溜息を吐くほどの大きな感謝を、あの横座の主に捧げねばならぬ。そうして今一人、この供養塔のために決して忘れてはならぬ恩人があったことである。